私の授業～うまくいったこと、いかなかったこと

所属	文学部芸術学科	氏名	長谷川一
テーマ	くるたのしい		

わたしの授業はどれもワークショップ形式の参加体験型だ。「芸術メディア論演習」では、自己紹介ツールを「発明」したり、じぶん自身について語るデジタルストーリーテリングの映像作品をつくる。「メディア文化論」では、じぶんの住む街を何度も観察して描きながら「異なる視点」を体験的に理解する。「なぜ働くのか」という主題のもとにディスカッションを重ね、考えたことを身体的に表現する授業を実施したこともある。文献講読のようなもっとも伝統的といえる授業でさえ、参加体験型の要素を軸に構成している。

いずれのばあいも重要なのは、結果というよりプロセスだ。じぶん自身で考え、話しあい、発表し、講評をうけ、ふりかえる。その活動のあらゆる局面にさまざまな学びが生起しうるよう、いろいろな仕掛けを埋め込んで授業を設計する。とはいえこの種の授業は教師と学生の対話で成り立っているわけだから、実際には予想外の展開を見せることがほとんどだ。そのつど教室という場の潮目を読みながら柔軟に対応してゆくことになる。

受講する学生たちの合言葉は「くるたのしい」。みんな大変そうだけど愉しそう。私語も内職もない。かれらの熱量は、時にこちらが当てられるほどだ。

明学に着任した2006年からずっと、こんなスタイルで授業をおこなってきた。けれど初めのころは残念ながら学内の理解はほとんど得られなかった。施設も機材もカリキュラムも諸々の規則も、何もかもが従来型の講義中心の発想でできていた。「変わった授業ですね」と言ってもらえれば良いほう。でもそれは明学に限られたことではなかったから、仕方がない。できる範囲で工夫と実践を重ね、少しずつ実績を積み上げてきた。結果的に、それはわたしにとって貴重な勉強になったとおもう。

近年「アクティブラーニング」などと活動に基盤を置いた学習手法が大学教育でも重視されるようになってきた。それ自体は歓迎すべきことだ。だが正直、現状は危惧のほうが大きい。形だけそれらしく整えるような話ばかりが先行しがちで、肝心の理論や思想が置き去りにされているように見える。しかしこの種の学習手法を有効に活用しようとするのなら、理論・思想・方法にかんする十分な理解とトレーニングが不可欠である。

参加体験型の学習手法を根本で支えるのは、「知識」にたいする従来とは異なる捉え方だ。知識を、抽象化された記述可能なものというより、状況のなかに分散的に埋め込まれていると考えるのだ。だから学習者にとって、活動の内側に身をおいて体験のプロセスのなかでみずから知識を見出してゆくプロセスが必須となる。そのときの教師のあり方は、知識を「上から」授ける者というより、むしろ伴走しながら支援するコーチに近い。このような考え方を現在の日本の大学教育に活かしてゆく余地は、たしかにまだ相当残されているだろう。

うまく組織された参加体験型の授業は、学生たちの力をびっくりするくらい大きく伸ばすことができる。けれど、けっして万能の魔法ではない。扱う主題や受講者のタイプなどにも向き不向きがある。教師の力量に依存する部分も小さくない。実際わたし自身もこれまで山ほど失敗をくりかえしてきた。

わたしたちがいま取り組むべき課題とは、新たな手法と従来型の手法、その両者を相互に補完させながら、それぞれの分野の特性や条件を踏まえつつ、21 世紀の高等教育にふさわしいスタイルを試行錯誤しながら練りあげてゆくことであるだろう。